

翻訳活動について

堀江 珠喜

(園田学園女子大学助教授)

ワイルドは出獄後、セバスチャン・メルモスという偽名のもとに、翻訳の仕事が続いていたといわれている。が、少なくとも既に公表されている書簡では、これに関して一言も語られていない。また書誌やワイルド研究の多くも、この翻訳活動には触れていない。そのため真偽も疑わしいのだが、これまでのところワイルド訳とされているのは、ペトロニウスの『サティリコン』と、バルベール・ドールヴィイの『死せざるもの』の二作である。

まず『サティリコン』について、(New York: Book Collectors Association, 1934)版の表紙には、“Translation Ascribed to Oscar Wilde”と記されている程度である。その「序」は作者の紹介のみで、翻訳者については全く説明がない。ワイルドがどのような状況にあって、いつ頃この仕事を行ったかなど知る由もないのである。

ところが他にもセバスチャン・メルモス、あるいはオスカー・ワイルド訳として『サティリコン』を1909年以前にパリのシャルル・カーリントンが出版した事実は認められる。1901年から『ドリアン・グレイの肖像』を出しているこの出版社は、その1909年版に読者へのお知らせの紙をはさんだ。そこには、セバスチャン・メルモス、あるいはオスカー・ワイルド訳による『サティリコン』と『死せざるもの』の出版の打ち切りが通告されていたのである。当然ながら、これはワイルド訳として出ていたことの逆説的な証明となる。

もし『サティリコン』を実際にワイルドが翻訳したのであれば、その意図は何だったのか。あくまで仮定の上での推測ではあるが、ホモセクシュアリティを謳歌した放浪記という内容にも、関係がありそうだ。

さらにペトロニウスは“arbiter elegantiae”つまり「粋の判定家」と呼ばれたほどの、帝政ローマ期のダンディであり、その文学や生活ぶりは世紀末デカダン達の好むところであった。ドリアン・グレイも、自分がペトロニウスの現代版になるかもしれないなどと考えて楽しむ。また『さかしま』の主人公、デ・ゼッサントもペトロニウスを高く評価し、『サティリコン』を味わうのである。このような世紀末的趣味を考えると、ワイルドがこれを翻訳しても不思議ではあるまい。とはいえ既に英語版は出回っていたようであるから、それほど文学的に意味のある作業とも思えないのだが。

さてデ・ゼッサントは、近代文学においてはバルベール・ドールヴィイに強く惹かれた。先に述べたように、ワイルド訳とされるもうひとつの作品、『死せざるもの』の作者である。これもワイルドの翻訳と断言するのは早いかもしれないが、その可能性は『サティリコン』よりも大きい。というのも現在リプリントで手に入るサンフラワー版のワイルド全集第13巻に、ワイルド訳ということで取められているのである。

このワイルド訳の初版は、フランスで刊行された1902年の500部限定私版であると考えられる。平井博は書誌の中で1928年に再版されたものを挙げているから、意外にロングセラーであったことになる。ただしこれらはワイルドの死後の出版であるから、この翻訳によって彼が利益を得たとは思えない。そもそも仏語版にしても、バルベール・ドールヴィイ自身、この作品を不道德なものと考え発表を遠慮したため、初稿から50年近くも経た1883年に出版されたほどなのである。重層的な近親相姦を扱ったこの長篇を翻訳しても、当時のイギリスに受け入れられるとは誰が期待したのだろうか。不道德といっても断じてポルノグラフィではないから、その方面からの需要も見込めまい。多くの時間とエネルギーを投入するわりには収入にならないことが明らかだったはずなのだ。

それでも翻訳を遂げたのは、「哀れみ」のテーマに魅せられたためではなかったか。「哀れみ」や「悲しみ」は1895—1900年のワイルドの心情と境遇を最もよく表す言葉であり、創作においても無視できない要素であった。ところがこれらは以前のワイルドのダンディズムとは相入れない。その葛藤を解決できるのが『死せざるもの』である。フランスの代表的なダンディ、バルベール・ドールヴィイが死せざるものとして「哀れみ」を語る——ここに自己の主義と心情との融合点を見出したワイルドが、翻訳という過程を通してその可能性を会得しようとしたのではないか。さらにバルベール・ドールヴィイのカトリシズムにも、ワイルドは魅せられたことであろう。

ワイルドの翻訳活動については、まだほとんど研究されていないし不明な点も多い。が、彼のダンディズムやカトリシズムという問題を扱うにあたって、翻訳活動に注目することにより、新しい議論の展開される余地が充分にあると考えられるのである。